

(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第36輯

都市計画道路磯之上山直線建設に伴う

今木遺跡

—— 発掘調査報告書 ——

1989

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第36輯

都市計画道路磯之上山直線建設に伴う

今木遺跡

—— 発掘調査報告書 ——

1989

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会



A・B地区航空写真（西方から）



A・B地区航空写真（北方から）



006-0D (西から)



032-0B (西から)

序 文

今木遺跡は、今回の都市計画道路磯之上山直線建設に伴う試掘調査によって、発見された遺跡です。遺跡内の既往の調査では、今木廃寺の一部が調査され平安時代の創建で、14世紀まで法灯を継いでいたことが明らかにされ、12世紀後半の優れた園池遺構も検出されています。今回の調査地は、その東に続く所で、縄文～弥生時代の遺構遺跡が検出されている軽部池西遺跡とにはさまれたところにあたります。

今回の調査の結果については、本報告書に詳しく記述したところですが、弥生時代の竪穴式住居跡や中世の掘立柱建物跡と溝、道路遺構等を発見しました。特に道路遺構は幅3mと比較的大規模なもので、現在水田畦畔にもその延長部分をたどることが出来るなど今後の追跡調査が期待されます。

本報告書が地域史の解明の資料として大いに利用されることを願って止みません。

最後に調査の実施にあたり、種々ご配慮いただきました大阪府土木部岸和田土木事務所をはじめとする関係各位に謝意を表しますと共に、特に貴重な人材を直接派遣いただいています近畿府県教育委員会並びに大阪府下市町教育委員会に対して深謝申し上げます。

平成元年3月

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

理事長 浅野素雄

例 言

1. 本書は、都市計画道路磯之上山直線建設予定地内に所在する、今木遺跡の発掘調査報告書である。

2. 調査は、大阪府土木部岸和田土木事務所の委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもとに、財団法人大阪府埋蔵文化財協会が実施した。

3. 調査は大阪府埋蔵文化財協会技師 山本 彰・佐々木好直を担当者として、2次にわたって実施した。調査期間は、下記の通りである。

第1次調査 昭和63年6月1日～昭和63年7月28日

第2次調査 平成元年1月17日～平成元年2月1日

4. 調査の実施にあたっては、大阪府土木部岸和田土木事務所・岸和田市教育委員会および地元関係各位の協力を得た。

5. 調査にあたっては、大阪府教育委員会文化財保護課の他、石野博信・中井一夫（奈良県立橿原考古学研究所）、近藤利由（岸和田市教育委員会）の各氏の御指導を得た。また、遺物整理の段階で、木下 亘・吉村和昭（奈良県立橿原考古学研究所）の御教示を得た。

6. 本書で用いた土壌色および土器類の色調は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』5版（1976）による。

7. 遺構写真撮影は調査担当者、遺物の写真撮影は小倉 勝が担当した。

8. 本書の執筆および編集は山本があたったが、石籾の項は実測図とともに橋本裕行が、瓦については近藤康司が担当した。なお、編集段階で虎間英喜の援助を受けた。

9. 本遺跡では、花粉分析・プラントオパール分析を実施した。このうち花粉分析についてのみ結果を付載として掲げた。

本文目次

序文

例言

第I章 調査に至る契機と経過	1
第1節 調査に至る契機	1
第2節 調査の経過と調査方法	1
第II章 位置と環境	3
第1節 今木遺跡の位置	3
第2節 地理的環境	5
第3節 考古学的環境	5
第III章 A・B地区の調査成果	8
第1節 地区の設定と基本層序	8
第2節 弥生時代の遺構	9
第3節 中世の遺構	14
第4節 近世の遺構	16
第5節 遺構出土の遺物	17
第6節 包含層出土の土器	20
第IV章 C地区の調査成果	22
第1節 基本層序	22
第2節 検出遺構	23
第3節 出土土器	25
第V章 まとめ	32
付載 今木遺跡における花粉分析	35

挿図・表・写真目次

第1図	調査地の地区設定	2
第2図	今木遺跡の位置	3
第3図	今木遺跡周辺の地質	4
第4図	今木廃寺出土の古瓦	6
第5図	経部池西遺跡西端部の検出遺構	6
第6図	今木遺跡周辺の遺跡分布	7
第7図	A地区北壁土層図	8
第8図	006-OD 平・断面図	9
第9図	007-OD 平・断面図	10
第10図	028-OX 平・断面図	11
第11図	010-OS 土器出土状況	12
第12図	018-OS 土器出土状況	12
第13図	014-OO 土器出土状況	13
第14図	032-OB 平・断面図	14
第15図	航空写真および地形図で推定した道路	15
第16図	上面の近世遺構平面図	16
第17図	002-OW 平・断面図	16
第18図	A地区遺構内出土遺物	18
第19図	002-OW出土遺物	20
第20図	A地区包含層内出土土器	21
第21図	C地区土層図	22
第22図	C地区出土主要土器の出土地点	24
第23図	C地区出土土器(1)	26
第24図	C地区出土土器(2)	27
第25図	C地区出土土器(3)	30
第26図	今木遺跡平面図	33・34
第27図	花粉分析フロー	35

第28図	花粉ダイヤグラム	36
表1	検出された花粉化石の種類一覧	37
写真1	花粉化石	38

図 版

巻頭カラー図版1	上 A・B地区航空写真(西方から) 下 A・B地区航空写真(北方から)
巻頭カラー図版2	上 006-OD(西から) 下 032-OB(西から)
図版第1	調査地と周辺の地形
図版第2	調査地航空写真
図版第3	A地区航空写真 上 南半部分 下 北半部分
図版第4	A地区遺構 上 006-OD(南から) 下 007-OD(東から)
図版第5	A地区遺構 上 土拡群(南から) 下 028-OX土器出土状況(南から)
図版第6	A地区遺構 上 014-OO,015-OO(北から) 下 011-OS土器出土状況(西から)
図版第7	A地区遺構・遺物 上 004-OS(南東から) 下 004-OS土器出土状況(北から)他
図版第8	A地区遺構 上 032-OB(南西から) 下 032-OB柱穴
図版第9	A地区遺構 上 047-OA(南東から) 下 047-OA北側側溝断面(南東から)
図版第10	A地区遺構・遺物 上 002-OW(西から) 下 同上他
図版第11	A地区出土土器 上 006-OD出土土器 下 028-OX出土土器
図版第12	A地区出土土器他 上 028-OX出土土器 下 004-OS出土土器他
図版第13	A地区出土土器 上 018-OS出土土器 下 同上
図版第14	A地区出土土器 上 014-OO,003-OO,005-OX出土土器 下 包含層出土土器
図版第15	C地区遺構 上 C地区全景 下 048-OS断面(東から)
図版第16	C地区土器出土状況
図版第17	C地区出土土器
図版第18	C地区出土土器
図版第19	C地区出土土器
図版第20	C地区出土土器
図版第21	C地区出土土器

第1章 調査に至る契機と経過

第1節 調査に至る契機

今木遺跡の発掘調査の契機となった、都市計画道路・府道磯之上山直線は、大阪臨海線磯之上地区と大阪外環状線積川地区を結ぶ道路で、新空港関連の道路としての位置づけがなされている。路線内の遺跡の取り扱いについては、大阪府土木部と大阪府教育委員会が協議を重ね、昭和58年に大阪府教育委員会が、路線内の分布調査を実施し、今木遺跡を含めて新たに11ヶ所の遺跡が周知されるに至った。この分布調査の成果をもとに、大阪府教育委員会と大阪府土木部は、再び協議を行い道路予定地内は、全線にわたって試掘調査が必要であるとの基本方針が確認された。

その後 前記の基本方針によって昭和59年度には、大阪府教育委員会によって、今木廃寺の発掘調査並びに箕土路遺跡・西大寺遺跡の試掘調査、軽部池西遺跡の試掘調査、三田遺跡の試掘調査が実施されている。昭和60年度になると当協会の発足に伴って、調査の主体が当協会へ移管され 現在までに、今木遺跡の他、箕土路遺跡・西大路遺跡・軽部池西遺跡・山ノ内遺跡・山直北遺跡・三田遺跡・上フジ遺跡・二俣池北遺跡・水込遺跡・山直中遺跡が一部を除いて終了している。

第2節 調査の経過と調査方法

発掘調査は、大阪府土木部の用地買収の関係で2次にわたって実施した。

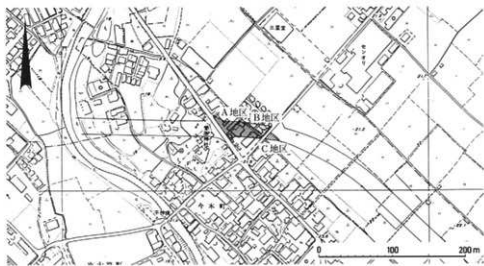
第1次調査は、本報告書のA・B両地区にあたり、調査面積1168㎡を対象として実施し、昭和63年6月1日に機械掘削に着手し、7月28日に終了した。第2次調査は、本報告書のC地区で、調査面積200㎡を対象として実施し、平成元年1月17日着手し、2月1日終了した。調査方法は、いずれも、表土層を機械掘削によって除去した後、包含層の人力掘削を実施し、遺構面を検出し、遺構の掘削を行なった。

調査区の遺構の全体図の作成にあたっては、航空測量を実施し、第1次調査では、7月12日、第2次調査では2月1日にそれぞれ撮影を実施したが、第2次調査については面積が狭小であることから、通常のヘリコプターによる撮影ではなく、レッカーによる撮影を実施している。

なお、発掘調査における遺構の実測および遺物の取り上げは、当協会の定める『発掘調査規定』によって国土調査法に基づく新平面直角座標の第VI座標系を使用し、区画の基本は、大阪府発行の1/2500地形図（大D-4-10）を12等分して500m×500mの方形区画をつくり、更にこれを25等分し、100m×100mの方形区画をつくり、最終的にこれを625等分して4m×4mの小区画で実施している。

〔註〕

- (1) 大阪府教育委員会 『三田遺跡試掘調査概要』1985年
- (2) 大阪府教育委員会 『今木庵寺跡発掘調査概要』1985年
- (3) 大阪府教育委員会 『軽部池西遺跡試掘調査概要報告書』1985年
- (4) 大阪府教育委員会 『三田遺跡試掘調査概要』1985年
- (5) (財)大阪府埋蔵文化財協会 『箕土路遺跡－発掘調査報告書－』1987年
- (6) (財)大阪府埋蔵文化財協会 『西大路遺跡－発掘調査報告書－』1988年
- (7) (財)大阪府埋蔵文化財協会 『軽部池西遺跡－発掘調査報告書－』1987年
- (8) (財)大阪府埋蔵文化財協会 『山ノ内遺跡－発掘調査報告書－』1988年
- (9) (財)大阪府埋蔵文化財協会 『三田遺跡－発掘調査報告書－』1987年
- (10) (財)大阪府埋蔵文化財協会 『上フジ遺跡－発掘調査報告書－』1988年
- (11) (財)大阪府埋蔵文化財協会 『二保池北遺跡－発掘調査報告書－』1989年

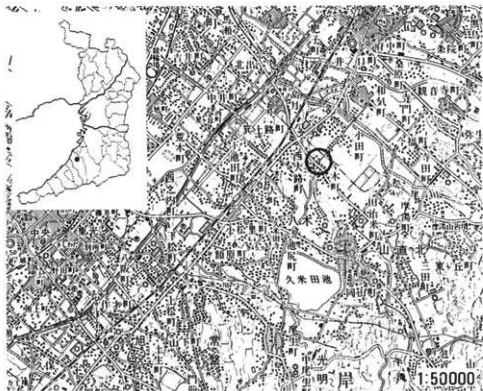


第1図 調査地の地区設定

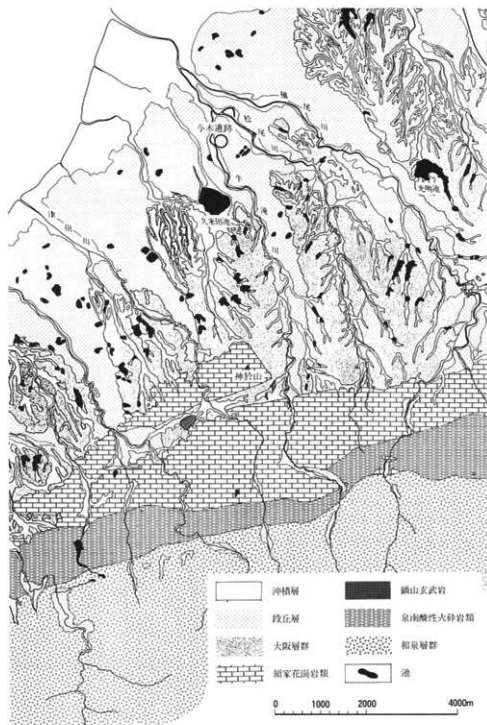
第II章 位置と環境

第1節 今木遺跡の位置

今木遺跡の所在する岸和田市は、大阪府の南部に位置している。市域は、南北に長く面積は、70.65㎢をはかり、大阪の衛星都市としての機能を有しており、大阪府と和歌山県を結ぶ、JR阪和線・南海本線や第2阪和国道の便利さと、更には今木遺跡発掘調査の端緒となった都市計画道路・府道磯之上山直線の開通とともに今後増々発展していくことであろう。岸和田市は前面に大阪湾、後背に和歌山脈を擁し、山地から海岸線へと変化に富んだ自然地形を、津田川・牛滝川をはじめとする多くの河川とともに構成している。行政的には、北および東側を、忠岡町・和泉市に隣接し、西側を貝塚市に隣接し、南側は葛城山頂を自然境界として和歌山県に接している。



第2図 今木遺跡の位置



第3図 今木遺跡周辺の地質

今木遺跡は、岸和田市東大路町に所在する。JR阪和線『久米田駅』の北東約1km、泉州地域最大の溜池として知られる久米田池からは北方約1.5km付近に位置しており、遺跡内には菅原神社が鎮座しており今回の発掘調査地は菅原神社の東側にあたる。

第2節 地理的環境

和泉地方は、和泉山脈から派出する丘陵とその前縁にひろがる洪積段丘および主として海浜部にひろがる沖積平野によって形成されている。丘陵部は、北方あるいは北西方向に伸びるものが中心で、丘陵間には狭い谷が奥深くまで入り込み、この谷間をぬうように和泉山脈から河川が大阪湾へ流れている。第3図でも明らかのように洪積段丘は、大きな谷部にもひろがるが、主として丘陵の前縁部に大きくひろがり、丘陵部とあわせて和泉地方の地形の大半を占めている。洪積段丘は、高位・中位・底位の3者に分類されるが、高位段丘は和泉地方では、和泉市信太山及び観音寺付近、岸和田市の久米田池南方、泉佐野市見手川左岸にみられる。中位段丘は、岸和田・貝塚・泉佐野・樽井付近と慎尾川中流沿いにひろがり、低位段丘は、大津川・佐野川・榎井川沿いにひろがりをみせている。沖積平野は、大阪湾沿岸にひろがっている。

今木遺跡は、地形分類上は牛滝川右岸に形成された低位段丘面の標高約20m付近に立地している。今回の調査地の大半は、既に宅地化がなされていたが、調査地の東方は緑豊かな田園地帯がひろがっており、和泉国特有の条里地割が遺存しており、地形的な景観を特徴づけている。

第3節 考古学的環境

次に今木遺跡周辺の考古学的成果を都市計画道路、府道磯ノ上山直線の既応の調査を中心にしてみていくことにする。

縄紋時代は、遺構としての確認は、縄紋晩期に属する土器棺墓を検出したにとどまるが包含層より多くの後期に属する土器片の出土した山ノ内遺跡と軽部池西遺跡をあげうる。

弥生時代では、住居址が検出された遺跡として、西大路遺跡・山ノ内遺跡・軽部池西遺跡がある。いずれも弥生時代後期に属しているが、集落のまとまりを検出するに至らない。

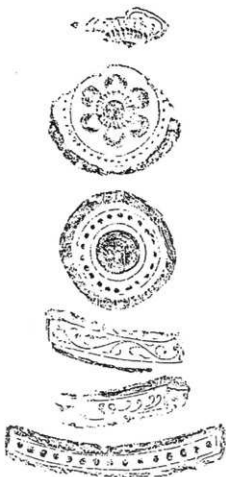
古墳時代では、東山丘陵の先端に周濠を有する全長約200mの規模を誇る摩湯山古墳が築かれており、鯖付円筒埴輪や陪塚の年代観から前期末の所産と考えられている。また久米田池の西方には、摩湯山古墳の築造にやや遅れて、久米田池古墳群が築かれる。古墳時

代の集落跡は、山直北遺跡・三田遺跡・上フジ遺跡・二俣池北遺跡において検出されている。これらは、いずれも、中期・後期に属するもので竪穴住居が主流を占めているが、集落が継続する遺跡では、6世紀末から7世紀初頭に掘立柱建物に変化することが判明している。

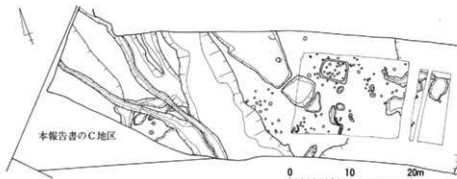
奈良時代の掘立柱建物は、山直北遺跡・三田遺跡・二俣池北遺跡・水込遺跡でまとまって検出されており、山直郷の一部をなすものと推定されている。また、三田遺跡では、平安時代に属する掘立柱建物も検出されている。

中世の集落としては、まとまりをもったものとして、山直中遺跡の掘立柱建物をあげうるが大きく12世紀後半から13世紀前半のものと14世紀後半から15世紀前半のものに大別されるらしい。

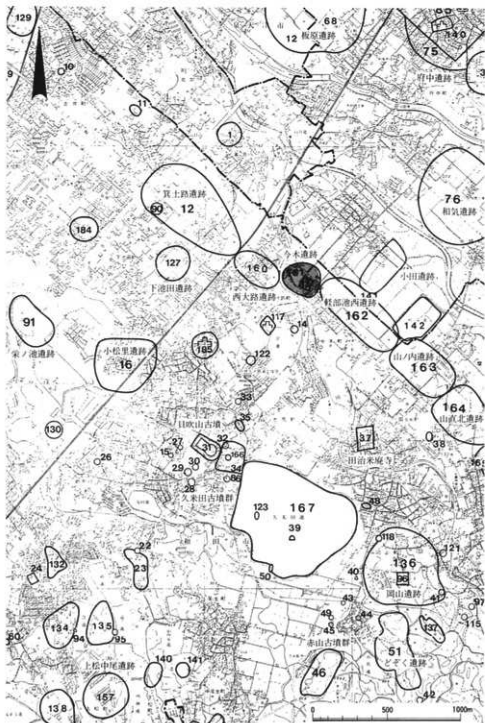
本来は、今木遺跡内に包括される今木廃寺では、出土瓦でみると、平安時代には創建がなされるようで、14世紀末まで存在したことが報告されている。また今木廃寺では、12世紀後半の庭園に伴う池遺構(園池)が検出されている。



第4図 今木廃寺出土の古瓦



第5図 軽部池西遺跡西端部の検出遺構



第6図 今木遺跡周辺の遺跡分布(1:25000)「大阪府文化財分布図」1986年を一部改変

第三章 A・B地区の調査成果

第1節 地区の設定と基本層序

地区の設定

発掘調査地は、水路および市道によって3ヶ所にわかれていた。このため便宜上、3分割された地区名を西から東に向かって順にA・B・C地区と仮称(第1図)している。なお、B地区については遺構および遺物が確認されなかったため本文から割愛した。

A地区基本層序

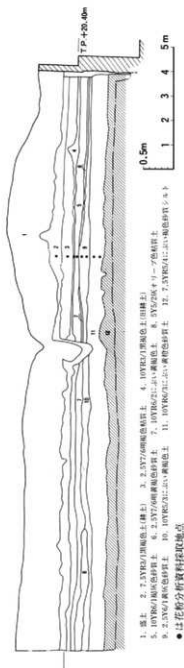
本調査区における層序は、宅地化された際の盛土を除くと大きく4層に分類することが可能である。以下各層についてのべる。

I層 宅地化以前の耕土層および床土層で、黒褐色土と明褐色粘質土層である。20~40cmの厚みではほぼ水平に堆積している。

II層 I層の下層の旧耕土下にみとめられる土層で、灰褐色の砂質土層を基本としている。調査区の全域に15cm前後の厚みではほぼ水平に堆積している。層中から、瓦器を中心に須恵器・弥生土器が出土する。中世の遺構の埋土でもある。

III層 A地区の東半部において認められる土層で、主として弥生時代の遺構の上部で認められた。黄褐色から暗褐色の粘質土層で、層の厚みは、10cm程度である。近世遺構および中世遺構の一部の検出面でもある。

IV層 当該地の地山層である。地域によって色調は異なっているが、明黄褐色粘質土が主流を占める。弥生時代および中世遺構の検出面である。

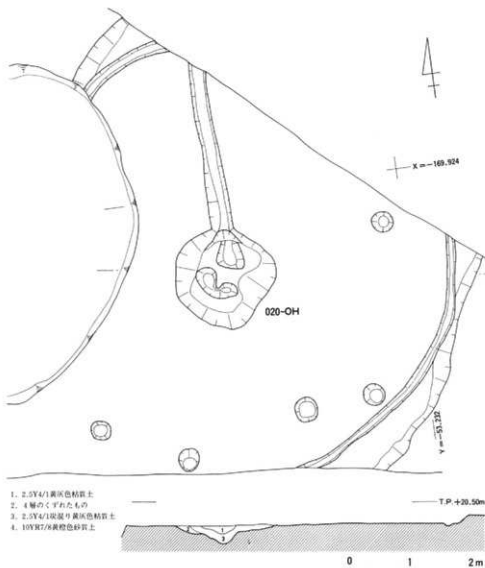


第7図 A地区北壁土層図

第2節 弥生時代の遺構

弥生時代の遺構には、竪穴住居址・土坑・溝などがある。

006-O D (竪穴住居址) A地区の東端で検出された円形を呈する竪穴住居址で、直径7.3m、深さ約20cmをはかるが、北側および南側が調査区外にあたることと、西側に攪乱が存在するため、全体の形状については明らかでない。埋土は、暗褐色粘質土である。



第8図 006-O D平・断面図

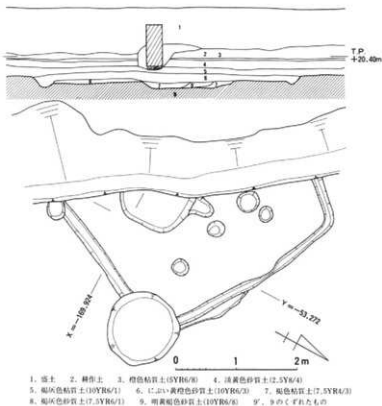
張床については明らかではないが、床面には炉・溝・ピット・壁溝が認められた。炉は床面のほぼ中央に位置しており、直径約1.6m、深さ30cmをはかる。炉の埋土は上層が黄灰色粘質土、下層が多量に炭の混じる黄灰色粘質土であるが、壁面および床面には焼けた痕跡は認められなかった。また、炉から壁溝へのびる幅約30cm、深さ約8cmの溝が検出された。溝底のレベルは、炉の底面のレベルと比べて高位置にあるため、炉の排水溝としての機能は考えにくい。住居内の排水を考慮したものであろう。ピットは直径40cm弱のものが5つ認められた。壁溝は幅18cm、深さ4cmをはかり、2段に掘り込まれていたが、東側の部分においては、認められなかった。

出土遺物は、埋土内より壺・高杯等の土器類とサヌカイトが出土している。

007-O D (竪穴住居址) A地区の西端で検出された隅丸方形を呈する竪穴住居址で1辺約3.8m、深さ約16cmをはかる。南半部は、調査区外にあたるため全体の形状については明らかにできない。埋土にはふい黄橙色砂質土が基本であるが東側部分では、6cmの厚さで褐色砂質

土が、ほぼ水平に堆積しており、張床の可能性を考慮することができる。

床面には炉・ピット・壁溝が認められた。炉は床面の中央部よりやや東側よりに位置し、1辺約1.15m、深さ8cmの隅丸方形状を呈すると推定される。埋土は炭混りの褐色粘質土であるが、床面および壁面には焼けた痕跡は認められ



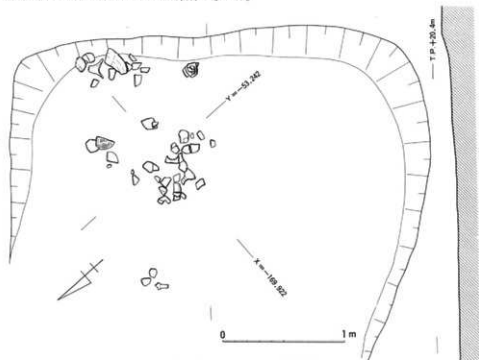
第9図 007-O D平・断面図

ない。ピットは4つ検出されたが直径約36cmのものが最大で深さは約16cm前後である。壁溝は、幅約21cm、深さ約4cmで、発掘面では、攪乱部分を除いて完周している。

出土遺物には、壺の口縁部や高杯の杯部が認められるが、いずれも細片であり、土器の出土量は極めて少ない。

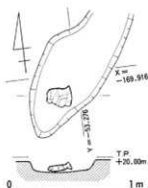
028-OX（不明遺構） A地区の東側で検出された一辺約7mの隅丸方形状を呈する落ち込み状の遺構であるが、北側および東側は後世の削平のため検出されなかった。深さは約10cmで、西側に向かって緩やかな傾斜をもっている。床面には付随する溝やピットは確認されなかったが、竪穴住居址である可能性が高い。埋土は黄褐色粘質土で、埋土内と床面の直上に張り付いた状態で比較的まとまって土器が出土した。

土器は遺構内の東側で集中した状態で検出されている。土器の器種には壺・甕・高杯等があるが、高杯の目立つことが特徴であった。



第10図 028-OX平・断面図

004-O S（溝） A地区のほぼ中央に位置する溝で主軸方向は、 $N-40^{\circ}-E$ である。中央部と南側では攪乱を受けているが、南側の攪乱の更に南では認められない。幅は一様ではなく、最も広いところで、約2.7m、最も狭いところで約1.4mをはかり、深さは約15cm～8cmである。埋土は、黄褐色系の粘質土層である。



第11図 010-OS土器出土状況は土拡状の広がりを有している。長さ約6.55m、幅約35cm、深さ約11cmをはかる。埋土は暗褐色粘質土で埋土内より壺の破片が出土している。

018-OS (溝) A地区のほぼ中央、004-OSの東南部に位置し、主軸は004-OSとほぼ平行である。形状は西側が浅く東方へのびるにつれ、しだいに深くなり幅を増す。西端は、012-OSに切られており後述する032-OBに重複する。幅は約70cmから1.8mで深さは約29cmから2cmをはかる。埋土は暗褐色粘質土で、出土遺物には、弥生時代に属する壺・甕・高杯をはじめとする土器片が比較的多く出土している。

003-OO (土拡) A地区の最東端に位置し002-OWに切られている。大半が調査区外のため規模は明らかではない。東方へ向かって傾斜しており最も深いところで約17cmをはかる。埋土は、暗褐色粘質土で壺・鉢・高杯の破片が出土している。C地区の自然河川の西肩の可能性もある。

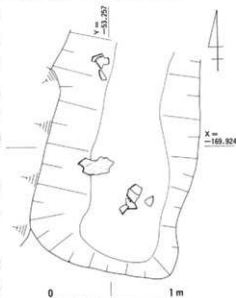
009-OO (土拡) A地区の東端に位置する南北に長い土拡である。長さ約1.14m、幅約47cm、深さ約12cmをはかる。埋土は暗褐色粘質土で埋土内からは、少量ではあるが土器片が出土している。

014-OO (土拡) A地区の西方、北寄りに位置する。近接して015-OO、016-OO、017-OOが存在する。東西に長い土拡で長さ約1.14m、幅約47cm、深さ約12cmをは

出土遺物としては、壺・甕・高杯をはじめとする弥生土器の他、縄紋土器・石畿が出土している。

010-OS (溝) A地区の西端付近に位置する。主軸はN-35°-Eで、北側は攪乱により切られている。現存する長さは約2.3m、幅約55cm、深さ約14cmをはかる。埋土は暗褐色粘質土で、埋土より甕が出土している。

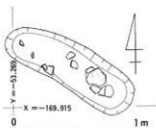
011-OS (溝) A地区西端部に位置する。主軸はN-19°-Eで、北側は東方へ折れ曲がり南側のほぼ中央部



第12図 018-OS土器出土状況

かる。埋土は暗褐色系の粘質土で、埋土内と床面に張り付くような状態で土器が出土している。器種には壺の口縁部および壺の体部と甕がある。

015-〇〇（土拡） 014-〇〇の北東約1mに位置する。径約56cmのほぼ円形を呈する土拡で、深さは約6cmをはかる。埋土は暗褐色粘質土で、埋土の上面において甕と考えられる土器の底部が出土している。



第13図 014-〇〇土器出土状況

016-〇〇（土拡） 015-〇〇の東側に位置する東西に長い土拡である。現存する長さ約1.35m、幅約68cm、深さ約14cmをはかるが東側は攪乱により切られており、本来の長さについては明らかではない。埋土は暗褐色粘質土で、埋土内より壺・甕の口縁部や壺の体部が出土している。

017-〇〇（土拡） 016-〇〇の北側に位置する土拡である。南北に長く現存する長さ約1.25m、幅約84cm、深さ約25cmをはかり、近接する他の土拡と比べて深いことが特徴である。埋土は上下二層に分かれ、上層はにぶい黄褐色粘質土で、下層はにぶい黄褐色粘質土である。埋土内より壺・甕等の土器の細片が出土したのみである。

017-〇〇の東側では、北側を005-〇Xに切られているが現存する長さ約88cm、幅約50cm、深さ約8cmの浅い土拡が存在する。出土遺物は全くなかったが、埋土は当該期特有のにぶい黄褐色粘質土であった。

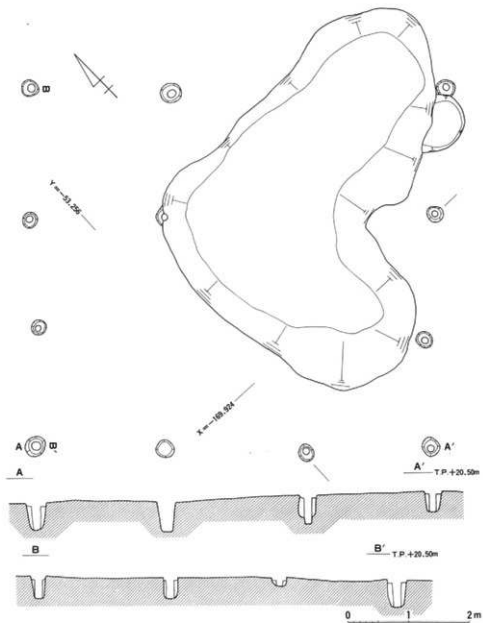
026-〇〇（土拡） A地区の東側で先述した028-〇Xの南側に所在する土拡で、東側は攪乱により切られている。長さ約1.06m、現存する幅約42cm、深さ6cmをはかる。埋土は暗褐色粘質土で埋土内より底部を含む土器類の細片が出土している。

005-〇X（不明遺構） A地区の北側に存在する落ち込み状の遺構で大半が調査区外へのびる。調査区内で検出された長さ25m、幅は最も広いところで約6.65mをはかり深さは約25cmで北方へ向かって緩やかに傾斜している。埋土は大きく二層に分けることが可能で上層は黄灰色砂質土、下層はにぶい黄褐色砂質土である。埋土内からは後・晩期に属する縄紋土器の体部片をはじめとして、サヌカイト、弥生時代後期から古墳時代前期にわたる土器片が出土した。谷もしくは自然流路の可能性もある。

013-〇X（不明遺構） A地区南端に位置する不定形な溝状の落ち込みで、長さ約4.65m、幅約1.35m、深さ約7cmをはかる。埋土は暗褐色粘質土で埋土内より壺・高杯の体部の土器片が出土している。

第3節 中世の遺構

A地区で検出した当該期の遺構には、掘立柱建物を中心として溝、道路があり、ほぼ全域に散在している。現在に残る条里の方向に平行することが特徴である。



第14図 032-O B平・断面図

032-O B (掘立柱建物) A地区のほぼ中央部の南寄りに位置する。桁行は3間で、6.3 m (21尺)、梁行は3間で6.0 m (20尺)をはかるほぼ方形に近い建物である。主軸は、 $N-43^{\circ}-E$ で条里方向と同一で、後述する溝・道路と平行もしくは直交する。柱間は、桁行が2.1~2.3 mで南側の中央の柱間はやや広く、入り口となる可能性が高い。梁行の柱間は1.8~2.1 mをはかる。北から一筋目の柱筋には間仕切りの柱穴が存在している。各柱穴は直径が約27~34 cmの円形で深さは約45 cm前後である。また埋土は灰褐色砂質土である。柱痕の痕跡は円形を呈し直径約15 cm前後をはかる。なお東側の梁行の北から二つ目の柱穴より柱痕もしくは礎板と考えられる木材が出土している。

045-O S・046-O S (溝) 両者とも032-O Bの梁行に平行する溝で後述する道路(047-O A)とともに掘立柱建物を区画する溝と考えられる。両者の距離は、約21 m (70尺)をはかり仮にこの数字を東側へ平行移動すると現道の東側の側溝と重なることが判明し、この数字が当地周辺の一つの区画をなすと推定される。溝の幅はともに約60 cmで、深さは10 cm前後をはかる。埋土はともに灰褐色砂質土層で出土遺物は無いが埋土が掘立柱建物と同一でありほぼ同時期に共存したものと考えられる。

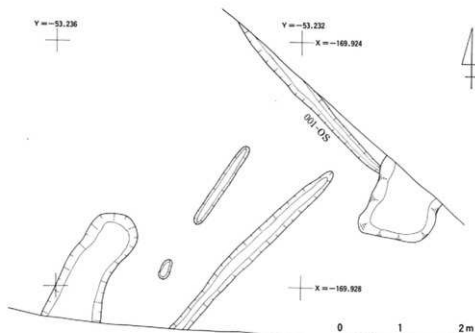
047-O A (道路) A地区の東側に位置する遺構で後述する測溝から道路と考えられる。主軸は $N-41^{\circ}-W$ で条里方向とはほぼ同一である。測溝は北側(041-O S)と南側(033-O S)の両方に存在し、両者の溝間の距離すなわち道幅は3.0 m (10尺)である。前者は幅約35 cm、深さ約15 cmで断面は「U」字型をなし、埋土は灰褐色砂質土である。またこの溝の外側には隣接してほぼ同規模の溝

(012-O S)が平行して存在している。後者は幅約30 cm、深さ約15 cmをはかる。埋土は灰褐色砂質土で、埋土内より瓦器・土師質小皿・瓦質練鉢の破片が出土している。また、この道ののびを航空写真を参考に推定すると調査地の南側において同様の地割りが3ヶ所においてほぼ直線を呈して認められる。

上記の他に同時期の溝として、043-O Sや044-O S等がありいずれも農耕に関するものと推定される。



第15図 航空写真および地形図で推定した道路



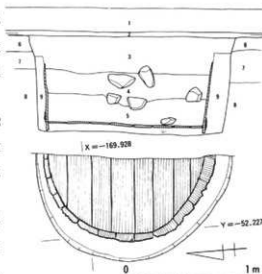
第16図 上面の近世遺構平面図

第4節 近世の遺構

近世に属する遺構には小溝と井戸他がある。両者はいずれもA地区の東端で検出されており旧耕土の床土下から掘り込まれている。

001-OS (溝) 幅約25cm、深さ約12cmをはかる。灰色の砂質土が埋土で後述する002-OWから派出している可能性が高い。

002-OW (井戸) 東半は調査区外へのびる。直径約1.6mの堀方の中央に底部の直径1.3mの桶が埋められている。埋土は上層が砂質土、下層がシルトで、下層からは染付磁器碗・棧瓦とともに平安時代の軒平瓦が混入していた。



1. 7.5VR3/1黒褐色土
2. 10YR7/8黄褐色粘質土
3. 10YR 6/4 濃い黄褐色砂質土
4. 10YR4/7黒灰色シルト
5. 10YR2/1黒褐色シルト
6. 2.5Y6/1黄灰色砂質土
7. 2.5Y5/4黄褐色粘質土
8. 10YR7/6明黄褐色土
9. 7・8の混入

第17図 002-OW平・断面図(レベルはT.P.+20.50m)

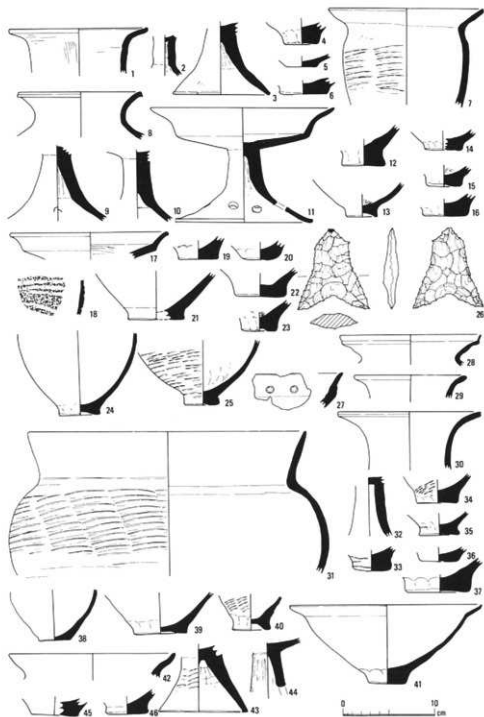
第5節 遺構出土の遺物

本節では前節まででのべた遺構内から出土した遺物のうち図化が可能であったものについて遺構ごとにのべる。

006-O D (第18図1~6) 1は壺の口縁部で直径15.0cmをはかる。外反する口縁部を持ち口縁端部の内面には段を有する。色調はにぶい黄橙を呈する。外面には縦方向のヘラミガキが施されている。2は中空の高杯の脚柱部で色調は淡橙色を呈する。3は高杯の脚部でわずかに内彎ぎみに下方へのびた後、更に外側にひろく形状をなし端部は平坦におさめる。内面にはシボリ痕がある。焼成は良好で色調は黄橙色を呈する。端部に黒斑が認められる。4~6は底部である。うち4は底部の外面に指頭圧痕が明瞭に残る。底部の直径はそれぞれ3.60cm、5.10cmをはかる。

028-O X (第18図7~16) 7は甕の口縁部および体部である。口縁部の直径は16.8cmをはかり最大径は口縁部にある。口縁部は「く」の字に鋭く屈曲して外方向へのび端部は丸くおさめている。体部の外面にはやや左下がりの叩き目が施される。色調はにぶい橙色を呈する。体部には黒斑が認められる。8は壺の口縁部である。口縁部の直径は13.4cmをはかる。口縁部は外彎し端部はやや垂下する。端部の中央はやや凹んでいる。色調は淡赤橙色を呈する。9・10は高杯の脚柱部である。前者は杯部との接合部付近から外下方へひろく。2孔一対の透し孔が存在する。色調は橙色を呈する。後者は中実で下部から外側へひろく。色調は灰白色を呈する。11も高杯で図化することにより全体を復元することができる。口縁部の直径20.0cm、裾の直径15.0cm、高さ12.5cmをはかる。坏部外側へ屈曲する口縁部と丸くおさまる口縁端部からなる。脚部はやや外反してひろがり裾部には4孔の透し孔が認められる。焼成は軟質で色調は浅黄橙を呈する。12~16は底部である。うち13は底部があげ底で一見して壺の底部とわかる。12・14~16は外面に指頭圧痕が残る。色調は概ね橙および浅黄橙を呈する。

004-O S (第18図17~26) 17は高杯の坏部である。緩やかに外反してひろく直径17cmの口縁部をもつ。体部内面には横方向へヘラミガキが施される。焼成は良好で色調は灰白色を呈する。18は縄紋土器の体部の破片である。4ヶ所に横方向の沈線が認められる。灰黄褐色を呈し雲母・石英を含む。河内産の土器であろう。19~23は底部である。19の外面には叩き目、20~23には指頭圧痕が認められる。24は壺の底部および体部である。底部の直径4.50cmをはかる。底部はやや上げ底で指頭圧痕が認められる。体部下方には黒斑が



第18図 A地区遺構内出土遺物 (26のみ現寸)

認められる。色調は橙を呈する。25は甕の底部および体部である。底部は直径3.70cmをはかり張り付けにより上げ底を呈する。体部の外面は叩き目が認められる。焼成は良好で色調は浅黄橙を呈する。26はサヌカイト製の凹基無茎石炭である。長さ3.20cm、幅1.90cm、重さ1.03gをはかる。先端部は若干欠損するがほぼ完形で、つくりは丁寧である。

018-OS (第18図27~37) 27は壺の口縁部と考えられるが細片のため口縁部の直径を復元するには至らない。外彎する口縁部を持ち、外面には現状で2個の竹管文が認められる色調はにぶい橙を呈する。28~30は壺の口縁部である。28は口縁部の直径15.3cmをはかる。口縁部は「く」の字形に屈曲し上方外にのび端部は上方に立ち上がる。色調はにぶい橙を呈する。29は口縁部の直径12.0cmをはかる。外彎し端部の丸い口縁部を有する。色調は浅黄橙である。30は口縁部の直径15.7cmをはかる。直立してのびる頸部と外彎してひろがる口縁を持つ。端部は平面をなし中央部はやや凹んでいる。焼成は軟質で色調は浅黄橙を呈する。31は口縁部の直径30cmをはかる大型の土器であるが体部の下方を欠損する。外傾してのびる口縁部と丸い端部を有し、体部の最大径は34cmをはかる。体部の外面にはほぼ横方向の粗い叩き目が施されている。焼成は軟質で色調は黄橙色を呈する。体部のカーブから全体の形状を復元すると器高は口縁部の直径とほぼ同じかやや小さいと推定できる。あるいは鉢と呼称できるかもしれない。32は中空の高杯の脚柱部である。色調は橙色を呈する。33~37は底部である。底部の直径は4.20cmから7.20cmをはかる。うち33・34には叩き目が認められ35・37には指頭圧痕が明瞭に残る。焼成は概ね良好で色調は黄橙もしくは橙を呈する。また図示したものの他に円形浮文に竹管文を施した文様を付す壺の口縁端部の破片が存在する。

003-OO (第18図41) 口縁部の直径21.0cm、底部の直径4.0cm、器高8.50cmをはかる鉢で図化することにより全体の形状を知ることができる。体部は上方へ大きく開き口縁部は外側へ屈曲し端部は上方へやや立ち上がる。底部には指頭圧痕が残る器壁の剥落が著しい。色調は橙色を呈する。

014-OO (第18図38・39) 38は小型の壺の体部から底部と推定される。平底で底部の直径3.50cmをはかる。色調は浅黄橙を呈する。39も壺の底部と推定される。やや上げ底の底部を有し底部の直径6.00cmをはかる。底部外面には指頭圧痕が残る。色調は褐灰色を呈する。

015-OO (第18図40) 甕の底部である。上げ底で底部の外面には指頭圧痕が残り、わずかに残る体部には左下がりの叩き目が施される。焼成は概ね良好で色調は浅黄橙色を呈

する。

005-OX (第18図42~45) 42は甕の口縁部である。口縁部の直径18.0cmをはかる。緩やかに内彎しながら外傾し端部の丸い口縁部を有する。焼成は軟質で色調は黄色を呈する。43は製壺土器の脚部である。底部の直径8.70cmをはかる。「ハ」の字形に開き外面には叩き目が施され、内面にはシボリ痕が残る。焼成は良好で色調は浅黄色を呈する。44は高坏の脚柱部である。2孔一対の透し孔が認められる。外面には縦方向のヘラミガキ、内面にはシボリ痕が残る。焼成は良好で色調は橙色を呈する。45は壺の底部で直径5.0cmをはかる。色調は橙色を呈する。

013-OX (第18図46) 甕の底部で底部の直径4.50cmをはかる焼成は概ね良好で色調は橙色を呈する。

002-OW (第19図) 002-OWから出土した遺物には軒平瓦・棧瓦・染付磁器がある。このうち軒平瓦と染付磁器の2点を図化した。前者は均正唐草文軒平瓦で右半部が残存する。瓦当文様は瓦当中央部やや凹面よりの一個の珠文を中心に三回反転する唐草文が展開する。また素文の周縁との境には一重の界線がみられる。脇区の部分は欠損している。調整は平瓦凸面部は罫目の叩きを行った後ヘラ削りを行なう。側面にもヘラ削りが施される。凹面部は摩耗が激しいが部分的に布目痕が残存している。頸は曲線頸であり瓦当面下半部は粘土を継ぎ足し頸部を形成している。焼成は軟質で色調は褐色を呈する。後者は底部の直径4.0cmの染付磁器碗であるが口縁部を欠損する。体部には草花文、高台には2本の横線が呉須によって描かれている。磁胎は均一で色調は明緑灰色を呈する。

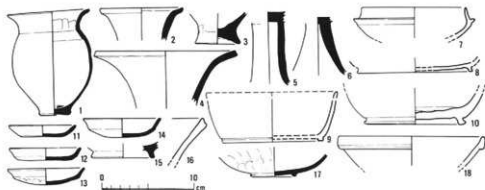


第19図 002-OW出土遺物

第6節 包含層出土の土器

包含層から出土した土器類には、弥生土器・須恵器・土師器・瓦器・白磁がある。包含層は基本層序でのべたII層とIII層にあたる。III層は弥生土器のみで他の土器は含まない。実測図は一括して第20図に示した。以下種類別にのべる。

弥生土器 (第20図1~6) 1は小型の壺でほぼ完形品である。口縁部の直径8.90cm、底部の直径3.10cm、器高11.3cmをはかる。内彎しながら外傾する口縁部と楕円形の体部を



第20図 A地区包含層内出土土器

有し底部はやや上げ底である。色調は浅黄橙を呈する。2は壺で口縁部の直径9.0cmをはかる。外反してやや立ち上がる口縁端部を有する。にぶい黄橙色を呈する。3は上げ底の底部で底部の直径4.80cmをはかる。色調は淡黄色を呈する。4は壺で口縁部の直径15.1cmをはかる。ラッパ状に開く口縁部を持ち端部は外傾する。色調は橙色を呈する。5・6は高杯の脚柱部である。5は中空で円筒形をなし色調は浅黄橙を呈する。6は下方へ向かって緩やかに開く形状を示し色調は橙色を呈する。いずれも弥生後期の所産である。

須恵器(第20図7～10・16) 7は坏身で口縁部の直径11.2cm、立ち上がりの長さ1.40cmをはかる。焼成は硬質で色調は灰白色を呈する。6世紀中頃のものであろう。8・9はいずれも高台を有する坏身で底部の直径はそれぞれ12.50cm、10.80cmをはかり、色調は白灰色を呈する。奈良時代のもので推定される。10は壺の底部で高台を有し底部の直径10.6cmをはかる。色調は灰白を呈する。16は東播系の練鉢である。13世紀代のものであろう。

土師器(第20図11・12) いずれも小皿である。口縁部の直径はそれぞれ7.20cm、7.70cm器高は1.30cm、1.90cmをはかる。いずれも手づくわで、色調は11が橙色、12が淡黄色を呈する。

瓦器(第20図13～15・17) 小皿と碗に大別できる。13・14は小皿である。前者は口縁部の直径8.20cm器高1.70cm、後者は口縁部の直径8.40cm、器高2.10cmをはかる。13の体部外面には指頭圧痕が残る。色調はともにオリーブ灰色を呈する。15・17は瓦器碗の底部である。底部の直径はそれぞれ6.50cm、4.80cmをはかる。色調はオリーブ黒を呈する。概ね13世紀代と推定される。

白磁碗(第20図18) 口縁部の直径15.6cmをはかる。玉縁状の口縁を有する。色調は灰白で磁胎は白色を呈する。13世紀代のものであろう。

第IV章 C地区の調査成果

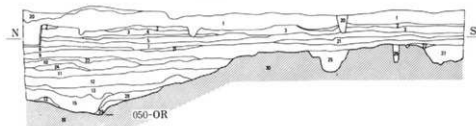
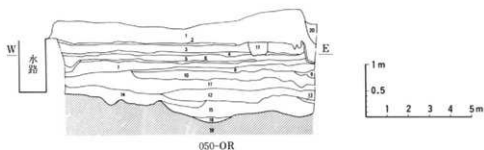
第1節 基本層序

C地区の基本層序は、ほぼ水平に堆積する第1層から第9層に分けることが可能である。これらは3層に大別しうる。以下各層の概要を述べる。

I層 第1層から第6層までで、現代の耕作土および過去の耕作土である。上面高はT.P. +20.3mである。遺物はほとんど含まないが下層では瓦器の小片が認められた。

II層 第7層からほぼ第9層までで、遺構面までに堆積した土層である。上面の高さはT.P. +20.3mである。黄褐色系の砂質土およびシルトが基本で中世の土器に混じって弥生土器の小片が出土した。

III層 地山層にあたる。上面高はT.P. +20.7mでこの面から遺構が掘り込まれている。上方は黄褐色砂質シルトであるが下方では砂礫に変化する。



1. 7.5YR3/1赤褐色土
2. 7.5YR5/8明褐色粘質土
3. 2.5Y4/6オリーブ褐色砂質土
4. 2.5Y5/6黄褐色粘質土
5. 2.5Y4/3オリーブ褐色砂質土
6. 2.5Y5/6黄褐色粘質土
7. 2.5Y4/2暗灰黄色砂質土
8. 2.5Y5/6黄褐色粘質土(マンガン含む)
9. 2.5Y5/6黄褐色粘質土
10. 2.5Y4/3オリーブ褐色砂質シルト
11. 2.5Y4/6オリーブ褐色シルト
12. 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト
13. 2.5Y3/2赤褐色シルト
14. N6/ 灰色シルト
15. 2.5Y6/1黄褐色細砂
16. 10YR2/3黄褐色砂質シルト(植物灰石)
17. 2.5Y4/2暗灰黄色砂質土
18. 2.5Y6/7黄灰色砂
19. 2.5Y5/2灰オリーブ色砂礫
20. 互層(黄土)
21. 2.5Y5/6黄褐色砂質土
22. 2.5Y4/6オリーブ褐色砂質土
23. 2.5Y4/6黄褐色砂礫質シルト
24. 2.5Y4/4オリーブ褐色砂礫
25. 10YR4/6褐色砂質土
26. 2.5Y6/3(土)黄褐色砂質土
27. 10YR4/6褐色砂質土
28. N6/ 灰色シルト
29. 5G7/1明緑灰砂礫
30. 10YR5/8黄褐色砂質シルト

第21図 C地区土層図(レベルはT.P. +20.80m)

第2節 検出遺構

C地区で検出された遺構には溝・土坑・自然河川があり、いずれも黄褐色砂質シルトを切り込んでいる。

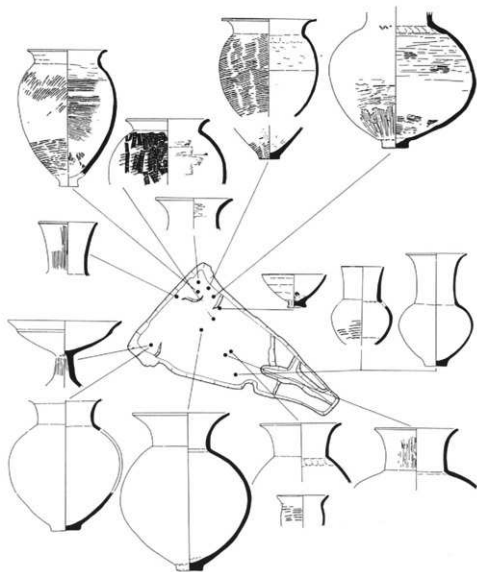
048-O S (溝) C地区の東端で検出された。幅約1.50mをはかる。東端は北側へ屈曲しひろがりを見せ西端は050-O Rに注ぎ込んで途切れる。中央部での深さは約48cmで断面は逆三角形を呈する。埋土は基本的に4層に分けることが可能で上層から灰黄褐色砂質シルト、にぶい黄褐色砂質シルト、暗褐色砂質シルトで北側から埋積した状況が観察できた。なお東側では北方から別の溝が048-O Sにほぼ直角に流入している。この溝は昭和59年度に大阪府教育委員会が実施した隣接地の調査（大阪府教育委員会『軽部池西遺跡試掘調査概要報告書』1985年）において検出されたSD-15と同一と推定される。両者ともに出土遺物はなかった。

049-O O (土坑) 048-O Sの北側に位置する。南北38cm、東西44cm、深さ41cmをはかるやや長円形の土坑である。埋土は灰黄褐色砂質シルトで出土遺物はなかった。柱痕は検出されなかったがピットとなる可能性もある。

050-O R (自然河川) 調査区の東端を除くほぼ全域において検出された。昭和59年度の大阪府教育委員会による隣接地の調査（前掲）のNR-1と同一である。幅については調査範囲内では明らかにできないが、A・Bの両地区において検出されないことと、最深部が東肩より約7mにあることを考慮に入れば西肩は現代の道路下にあたる可能性が高く幅約15m前後になると推定される。流路の主軸は既述の調査を参考にすると蛇行はするもののほぼ南北になるようである。深さは最も深いところで約1.20mをはかる。埋土は第21図に示したように最下層には砂層がたまり、その上は巨視的にみれば砂層・砂質シルト層・シルト層の互層であり常に水の流れていたことがわかった。

なお、この自然河川がほぼ機能を停止したと考えられるT.P.+20.3m付近では荒い砂の溝状の堆積が認められた。この砂層中からは古墳時代前期の土器が出土しており流路の埋没時期の一端を示すことが判明した。

出土土器はすべてT.P.+20.1m付近の暗灰黄色砂質シルト層以下の堆積土中から検出された。いずれも弥生時代後期に属するもので壺・甕をはじめとて大方の器種が存在している。土器の出土状況の特徴は土器がまんべんなく出土するのではなくかたまりとしてとらえることであり、密集するものについては同一個体となるものが多かった。出土状況



第22図 C地区出土主要土器の出土地点

は、口縁を上にしたもの、横をむいたもの、下にむいたものさまざまで規則性をみいだすには至らず、捨てられたとみるのが最も自然であった。ただ復元すれば完形になるものがいくつか存在することを考慮に入れるならば、単に破損したものを捨てただけではなく、祭祀品として投棄されたものを含む可能性のあることが指摘できる。

第3節 出土土器

C地区において土器の出土が認められたのは50-O Rの埋土内のみである。出土土器の総量は整理用コンテナ6箱分を数える。そのうち図化が可能なものは38点であった。器種は壺・甕・鉢・高坏等が認められた。大半は弥生時代後期に属するものであるが、縄紋土器が1点と古墳時代前期の土器が若干存在する。このうち古墳時代のものについては上面の砂層の堆積した溝状遺構からの出土であることから弥生土器については一括性があると考えられる。土器は全体をみわたすと器壁の残存状況の良くないことが特徴で調整技法の不明なものが多い。また胎土中に結晶片岩を含む土器も存在しており紀伊地方との交流を推定することができるものも存在する。以下器種ごとにのべる。

広口壺 1～9が広口壺にあたる。

1は口縁部の直径17.5cmをはかる。体部下方を欠損する。ほぼ直立する頸部と外反する口縁部を有し口縁端部は外傾する。球形の体部を有すると推定される。頸部の外面には縦方向のヘラミガキが施される。焼成は概ね良好で色調は頸部が淡橙色、体部は白灰色を呈する。2は口縁部の直径16.0cmをはかる。緩やかに外彎してのびる頸部と外反する口縁部を有する。口縁端部は外傾する。口縁部内面には横方向のヘラミガキが施される。色調は外面が浅黄橙色、内面はにがい黄橙色を呈する。黒斑が認められる。3は口縁部の直径13.0cmをはかる。体部下半は欠損する。外傾してのびる頸部と外反する口縁部を有する。端部は外傾する。体部と頸部との境には指頭圧痕が認められる。焼成は軟質で色調は浅黄橙色を呈する。4は口縁部の直径13.9cmをはかる。体部下半は欠損する。なで肩の体部を有し体部と頸部の境は明瞭ではない。内傾する頸部と鋭く外反する口縁部を有する。口縁端部は外傾しやや垂下する。口縁部外面には指頭圧痕が残る。焼成は軟質で色調は橙色を呈する。胎土には結晶片岩を含んでおり紀伊産と推定される。

5は口縁部の直径20.0cmをはかる。体部以下を欠損する。外傾してのびる頸部と下方へ垂下し断面が凹面をなす口縁端部を有する。口縁端部は現状では文様はないが部分的に円形浮文のはがれた痕跡が認められる。色調は外面が浅黄橙色、内面は橙色を呈する。胎土には大粒の結晶片岩を含んでおり紀伊産と推定される。6は広口壺の体部であるが口縁部を欠損する。底部は中央部がやや凹み直径5.0cmをはかる。球形の体部を持つ。底部外面には指頭圧痕、体部内面の下方にはハケ目、体部と頸部の境の内面には指頭圧痕が残る。焼成は良好で色調は灰白色を呈する。